



Tokyo Gakugei University Repository
東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	雑誌『みちびき』と内田武志・内田八子(fulltext)
Author(s)	石井,正己
Citation	東京学芸大学紀要. 人文社会科学系. I, 70: 160-141
Issue Date	2019-01-31
URL	http://hdl.handle.net/2309/150696
Publisher	東京学芸大学学術情報委員会
Rights	

雑誌『みちびき』と内田武志・内田ハチ

石井正己*
(日本語学・日本文学分野)

要 旨

戦後の菅江真澄研究を進めた内田武志と内田ハチには、一一年間の空白期間があるとされてきた。しかし、この度発見された雑誌『みちびき』によって、その前半は須藤春代の詩集『春のだいち』を展開する盲教育のあり方に専心していたことがわかってきた。キリスト教の精神を背景にした盲教育は、アンマになって喰べてゆければいいとする常識を遥かに超え、人間としての尊厳を尊重しようとするものであった。こうした考え方は、今日の教育や福祉を考える上でも重要な意義を持つと考えられる。

キーワード…『みちびき』、内田武志、内田ハチ、須藤春代、盲教育

一 内田武志・内田ハチの空白期間と『みちびき』

平成二四年(二〇一三)から、秋田県立博物館菅江真澄資料センターで、「内田武志の軌跡」と題する講演を重ねてきた。幸いこれは、平成三〇年(二〇一八)八月、『菅江真澄と内田武志―歩けぬ探訪者の探究―』(勉誠出版)として発刊できた。

また、内田ハチについては、平成二九年(二〇一七)七月、野呂昭編『菅江真澄に見られる科学的記録―内田ハチ遺稿集―』(私家版)が発行され、巻頭言に「菅江真澄と内田ハチ―科学・教育・図絵―」を寄せた。講演記録として

の「菅江真澄と内田ハチ―科学・教育・図絵―」も平成三〇年三月、『真澄研究』第二二号に載った。

こうして内田武志と内田ハチを研究してきたが、昭和二九年(一九五四)一〇月の内田武志『春のだいち』(岩崎書店)の後の中断が埋められなかった。内田武志は昭和三四年(一九五九)四月の「筆のまま」『叢園』第五一号、昭和三八年(一九六三)一二月の「菅江真澄と四つの地誌」その書誌学的研究Ⅱ『出羽路』第二二号はあるものの、昭和四〇年(一九六五)一二月の宮本常一共編訳『菅江真澄遊覧記Ⅰ』(平凡社)までの一一年間はほとんど業績がない。

* 東京学芸大学 日本語・日本文学研究講座 日本語学・日本文学分野 (184-8501 小金井市貫井北町4-1-1)

また、内田ハチは、『春のだいち』を受けて、昭和三十三年（一九五八）一月の「心のふるさと」『文化と教育』第九巻第二号、昭和三十四年二月の「人間性へのめざめ（日本）―むじゅんの愛情が生む悲しみから―」『ニューエイジ』第一巻第二号があるものの、それ以外の業績は見られなかった。

『春のだいち』は、洪沢敬三が予感したように、内田武志に大きな影響を及ぼし、菅江真澄研究に力が入らなくなったらしい。いくつかの文章から、内田ハチが『みちびき』という雑誌を、須藤春代と関わった秋田榎山教会の関係で編集していたことがわかってはいたが、雑誌が見つからなかった。そうした中で、平成三〇年五月、講演を聞いてくださった原修さんから郵便で、秋田榎山教会から資料が見つかったというお知らせとともに資料が送られてきた。そこで、今年菅江真澄没後一九〇年のよい機会なので、それを紹介することにした。

青いB5のファイルには、表紙は黒鉛筆で「榎山教会総会資料」とあり、上から黒マジックで「青年会／盲人伝道／関係資料 1950年～60年」、背文字は黒マジックで「百周年記念文集」、裏表紙は黒鉛筆で「秋田榎山／渋谷美佐」と書かれている。おそらく初めに黒鉛筆で書かれ、後から黒マジックで書かれたものと思われる。

ファイルの中を見ると、黄色の紙に黒マジックで「青年会」と書かれ、『みちびき』三冊が挟まれ、次に黄色の紙に黒マジックで「盲人伝道」と書かれ、何枚かの書類が挟まれていた。この黒マジックは表紙・背文字と同筆であり、「青年会」「盲人伝道」は表紙の「青年会／盲人伝道／関係資料」と対応する。「青年会」の中にあつた『みちびき』三冊は昭和二十九年五月一〇日発行の第三号、昭和三十一年（一九五六）一〇月発行の第一〇号、昭和三十三年一月発行の第一二・一三合併号であつた。続く「盲人伝道」に綴じられた書類を順に挙げて、次の八点になる。

- ① 「盲人のために点訳奉仕を！」 「点字一覽表」 「点字入門」（謄写版一枚）
- ② 「生徒氏名・父兄氏名・住所」の名簿（手書き一枚）
- ③ 「盲人伝道会講演会趣意書」（昭和二十九年四月、謄写版一枚）
- ④ 「秋田榎山教会盲人伝道会規約」（謄写版一枚）
- ⑤ 「御通知 秋田榎山教会盲人伝道会々々 土合竹次郎」（謄写版一枚）

⑥ 「第一回 下浜クリスト教盲人修養会」（昭和二十八年八月、謄写版一枚）

⑦ 「盲人伝道会後援会々々員名簿」（手書き二枚）

⑧ 「盲人伝道会報告 31年度事業報告」（手書き一枚）

これらの資料の他にまだ残っているものがないか、捜していただいている。特に『みちびき』は第一号と第二号、第四号から第九号、第一一〇号が発行されており、第一四号以降が発行されたかもしれない。これらの号を見ることができていないが、ともかくこの三冊だけでも貴重であり、内田武志と内田ハチの空白期間を埋めるのに役立つと考えた。そこで、特に第一二・一三合併号に載った二人の文章に絞って述べてゆくことにする。この雑誌に載った二人の文章はこれまで知られていないものであり、この雑誌でなければ読むことができないので、長くなることを厭わず、引用することにした。その点についてご理解を賜りたい。

二 発見された『みちびき』三冊の内容

昭和二十九年五月一〇日発行の『みちびき』第三号は「盲人伝道会修養会特集号」であり、秋田榎山教会盲人伝道会から謄写版で発行された。この盲人伝道会については、昭和六三年（一九八八）発行の『日本基督教団秋田榎山教会百年史』（秋田榎山教会）に詳しい。先の渋谷美佐もこの協会の受洗者である。発行は昭和二十九年五月なので、雑誌『みちびき』の発行は『春のだいち』発刊を遡ることになる。従って、『春のだいち』はこうした活動の中から生まれてきたことを考えてみなければならぬ。裏表紙に「目次」があるので、本文を参照しながら掲げてみる。

表紙絵	盲生徒作品
表紙裏	盲人伝道会々々員名簿（八九名）
信仰と職業	土合竹次郎（秋田榎山教会牧師）
第二回盲人伝道会修養会日記	富樫知一
修養会報告	小山みや子、須藤春代
修養会を終えて	

神の愛
感謝の数日
三浦路子 (秋田盲学校教師)
三浦 喆 (専攻科一年)
石川文一 (高等部二年)
山県志保子 (中学部三年)

田ハチ方のみちびきの会からタイプ版で発行された。第四号から第九号が未見だが、秋田榎山教会から離れて、内田ハチの自宅に置かれたみちびきの会が発行所になっている。やはり裏表紙に「目次」があるので、本文を参照しながら掲げてみる。

佐藤ツナ (高等部一年)
佐藤久美子 (高等部一年)
須藤春代 (高等部一年)
鈴木次男 (高等科三年)
和泉静子 (中学部三年)
梶原清一 (高等部一年)

「みちびきの会」のこと
目に見えるもの (詩)
海をへだてて
盲教育あれこれ
わたくしの日記から

無記名
甲斐八重子
内田ハチ
今井秀雄 (神戸市盲学校校長)
野沢シゲ子
(新潟県立高田盲学校中学部三年)

盲人伝導会修養会によせて (座談会)
修養会の感想

(通信)

主よ彼等の眼の見えん事を

富樫知一 (教会員、秋田短大教官)

私の場合

杉原澄子

詩 (六編)

須藤春代

点字奉仕のこと

大貫明子

編集室だより

内田ハチ

友を想う

小谷佐智子
(大阪市立盲学校高等部三年)

沈黙

奥谷喜代司
(大阪市立盲学校専攻科二年)

自分というもの

村田やす子
(大阪市立盲学校専攻科二年)

まちがい

石松量蔵
(盲教師、日本福音ルーテル広島協会)

(通信)

加藤 裕 (秋田大学助教授 哲学)

コワバツタ舌

杉原敬子

(通信)

佐竹るり子

(通信)

福田安夫 (埼玉県立盲学校)

盲児をもつ母のことは

H生

(通信)

和波その子



「目次」の「修養会を終えて」に中田きみの名前があるが、本文には文章が見つかからない。

昭和三十一年一〇月発行の『みちびき』第一〇号は秋田市保戸野川反一の内

けむり (詩)

浦川ふさ子

(宮城県立盲学校高等部二年)

(通信)

後藤益雄

クリスチヤン・ヒューマニズムを提唱する 熊谷鉄太郎 (盲教師)

ぬきがき

U生

神と共に歩む生涯

古矢佐助

私どもの研究

点字数学記号の新体系化について 伊藤礼子・尾関育三 (内田ハチ)

おぼえがき

研究あとがき 今井秀雄 (神戸市盲学校校長)

文部省 辻村泰男氏にあてて

伊藤礼子

こたえ

辻村泰男 (文部省初等中等教育局
初等特殊教育課特殊教育主任官)

々みちびきの会々内田ハチ先生に宛てて 尾関育三

(通信)

(東京教育大学大学院在学)

(通信)

鴨井慶雄

(通信)

大野加久二

(通信)

安達菊雄 (静岡県立静岡盲学校教員)

(通信)

栗津キヨ (高田盲学校教師)

たくましく生くる力

穴戸 勇

(通信)

(静岡県立中央病院研究検査科)

(通信)

大村善永 (盲教師)

いこいの部屋

浦川房子

(通信)

(宮城県立盲学校高等部二年)

(通信)

野沢茂子

(通信)

(新潟県立高田盲学校中学三年)

(通信)

中村歌子

(通信)

吉沢幸平

(通信)

鈴木和子 (福島県立郡山盲ろう学校)

(通信)

三浦聖子 (救世軍女子青年館)

庶務報告

無記名

編集後記

H

佐竹るり子

発行所がみちびきの会に変わったことで、秋田という場の拘束を外れ、盲学校の関係者を中心にして、全国から寄稿されていることがわかる。「みちびきの会」の「こと」の「目的」には「キリスト教ヒューマニズムの観点にたち広く盲人の可能性を生かし、人格ある一個人として社会に立つよう助力します」とあり、「構成」には「この会は盲人の問題に晴眼者が参加してともにその解決にあずかるためのものですから、盲人及び晴眼者のものです」とある。
昭和三十三年一月発行の『みちびき』第一二・一三合併号は、やはり秋田市保戸野川反一一の内田ハチ方のみちびきの会からタイプ版で発行された。裏表紙に「目次」があるので、本文を参照しながら掲げてみる。

「みちびきの会」のこと

無記名

日本の悪路

内田ハチ

わたくしの日記から

野沢シゲ子

(通信)

(新潟県立高田盲学校別科一年)

(通信)

栗津キヨ (新潟県立高田盲学校教師)

(通信)

野沢シゲ子

(通信)

(新潟県立高田盲学校別科一年)

(通信)

大村善永 (盲教師)

教育研究所が欲しい

内田ハチ

教育研究所が欲しい

鈴木彪平

私の心のそこからの叫び

鈴木彪平

鈴木彪平さんの文を拝見して

(栃木県立盲学校教師、全盲)

尾関育三

尾関育三

尾関育三さんにこたえて

(東京教育大学大学院学生、全盲)

晴盲の話合いについて

鈴木彪平

伊藤礼子

伊藤礼子

盲学校の健眼教師としての若干の感想 八谷 正 (大阪市立盲学校教師)
 わたくし 의견 金子十三松

弱視学校設立を望む (埼玉県立川越盲学校教師、全盲)
 中野清吉 (神戸市立盲学校教師)

偶感 丹羽石見 (高松盲学校教師、全盲)
 アメリカ教育に学んだこと 富樫知一

おたより (オクラホマ州フイリップス大学大学院)
 長谷川了示 (福井県立高田盲学校教師、全盲)

身障者をかこむ人びと 遠藤ワカ (山形市城北青鳥学園寮母)

身障者をかこむ人びと 内田ハチ
 盲人の妻のことば 大村きみ子 (盲教師大村善永氏夫人)

高橋トキ (牧師高橋万三郎氏夫人)
 熊谷みね (熊谷鉄太郎氏夫人)

おたよりから 鈴木たみ (栃木盲鈴木彪平氏夫人)
 鳥居伊都 (日盲連会長鳥居篤治郎氏夫人)

栗津キヨ (新潟県立高田盲学校教師、全盲)
 安田いと (安田菊政牧師夫人)

渡辺玲子 (宮城県立盲学校渡辺一男氏夫人)
 内田ハチ

青木綾子
 伊藤 盛

妹のことば 佐竹るり子
 鈴木和子

詩 (三編) 内田武志
 より子さんのために

母の手紙

(通信) より子の母より
 (通信) 鈴木みさを

(通信) (鈴木みさを)
 (通信) 妹静子から

(通信) 鈴木みさを、鈴木和子
 (通信) (鈴木みさを)

(通信) (鈴木みさを)
 (通信) (鈴木みさを)

(通信) (鈴木みさを)
 (通信) (鈴木みさを)

うちに迎えて 内田ハチ
 みちびきの会の意義 梶原清一

わたくしどもの在り方 内田ハチ
 註1 日本の子供達 宮本常一

註2 内田武志・ハチあて書簡 宮本常一
 註3 春のだいち を読んで 辻村泰男 (文部省特殊教育主任官)

註4 「辻村泰男氏の書簡」をを読んで 熊谷鉄太郎 (盲教師)
 辻村氏書簡の感想 大村善永 (盲教師)

(紹介) (眼がほしい) 無記名
 あたりまえのこと 内田武志

みちびきの読後感 福田守夫 (川越盲教師、全盲)
 藤原つね (宮城県立盲学校寮母)

金 慶還 (日本大学芸術学部音楽科、全盲)
 平方義信

熊谷鉄太郎 (盲教師)
 鳥居篤治郎 (日盲連会長)

福田 与 (京都府立盲学校教師)
 柏井光蔵 (日本盲伝道協議会委員長)

長谷川茂代(愛の友協会)

鴨井慶雄(大阪市立盲学校教師)

高田富美野

(横浜訓盲学院教師、全盲)

小関豊太

(山形県左沢町国立療養所光風園)

内田千都子(中途失明)

甲斐八重子

佐々木いく

(前秋田師範体育教官、自宅療養者)

高杉一郎

(静岡大学教育学部教育研究所)

鈴木均(平凡社編集部)

内田ハチ

山中 鎮

松井新二郎

岩本悦郎

高桑耕助

内田ハチ

伊藤礼子

「盲学校用物理教科書」を読んで

点字数学記号・点字数学教科書についてのその後の報告

伊藤礼子

盲児に対する空間指導

尾関育三

小柳昭代(旭川盲学校教師)

丹羽石見

H

無記名

庶務報告

みちびきの会はさらに全国的な展開をしていたことが知られる。詳細は以下で検討する。

三 内田武志「より子さんのために」と内田ハチ「うちに迎えて」

第二・一三合併号には、やや唐突に、内田武志「より子さんのために」が掲載されている。この前の第一一号に文章があったのかもしれないが、わからない。この文章は、昭和三年(一九五七)一〇月二五日、より子さんにあてた書簡をそのまま公開したものらしい。この日は内田の四八歳の誕生日であった。

より子さんのために

内田武志

十月も末近いきようこのごろになると、北国の秋田では、朝方は相当に冷えこみます。今朝などは三度七分ということでした。きようはわたくしの誕生日です。

わたくしの誕生日を記念するというほどのものでもありませんけれども、きようあなたのために、(岩のある庭の風景)(外村繁著、講談社)という短篇小説を送りました。この本の巻頭に収載されてあるその題名の文には、あなたと同様な欠陥をもつた叔父にあたる男性の苦悩をあつかっております。

著者は地の文のなかでも、自分には色素欠乏症の遺伝因子があると書いていますから、このような家族をもつていたことはおそらく事実なのでしょう。この小説をあなたがどんなに深い気持で読まれるか改めておききするまでもないように存じます。

先日のラジオニュースは、さきごろ開催された国際こう素化学学会で、ある米国の学者が、血友病や色素欠乏症は、あるこう素の不足が原因だと発表したと伝えていました。もしこれで病気の発生原因が正しく究明されたのであれば、やがてその療法が薬理学からも発表される日がそう遠くはないかと思われまます。

あなたの苦しみ、そしてわたくしの苦しみ、広い世間には同じような病気で悩んでいるひとたちが、どれだけ多いか知りません。今まではまったく治療の方法も与えられずに当てるの苦痛を味わったことですが、これからは希望をもつて生きてゆくことができるでしょう。そのような日の一刻も早く来ること

を心から待望しています。

想えば、本当にわたくしはよく今日まで生き永らえてきたものだ、われながら感心いたします。これを「生かされた」というのでしょうか。いくども出血のために生命が危くなりながらも、ふしぎにこの世にふみとどまることができました。きつとまだ生きてはたすべき仕事が残っているためかもしれないせん。自分と同じような苦しみを荷うひとびとのために、何かをしてあげられたらと願う気持は、自分の身体が弱まるとともに、ますます強くなつてきますのは、ふしぎなほどです。両脚がまつたく使われず、衰えた身体でベットに寝たつきの生活ももういふんたちました。いつも寒冷な気候になりますと、よく内出血をおこすのですが、近年は胃腸から出血する癖がついて今年の正月ごろなどは本当にひどかつたのです。あなたにも大変ご心配をおかけしましたね。「夏休みにはどうしてもお訪ねしなければ、もうお逢いする機会がないような気がするのです」といつて、あなたが遠い処をわざわざ出かけて来て下さつたのが、はじめての対面でした。しかしもうあなたについてのいろいろな事情は、すでにうかがつておりました。

早いものでもはや三年たとうとしています。あなたが、そのころ出刊された(春のだいち)を読みたいと申込んでこられてからのおつきあいでした。

「私たちは人間として生きることは許されないのでしょうか。私は生きたい、人間的に生きたいのです。私たちの本当の姿を理解してほしいと思います。生きるの間違いでしょいか」

あなたの(真実の姿)をうちあけてこられたときは、実はすくなくらずおどろきました。そしてその時のあなたの言葉には心の底からゆさぶられるような深い感動をおぼえたものです。これを同じ場にたつ人間として、このままにしておいてよいかと、わたくしは何とも云いようのない、眼にみえないものに対して腹の底から怒りと悲しみがわきあがつてくるのを覚えるのでした。

しかし、なんとという悲痛な叫びだつたでしょう。二十数年の間、押えにおさえられてきたものの当然すぎるほど当然な発言でした。どうしてこれが今まで取りあげられなかつたのでしょうか。この気持をどうして生かしてもらえなかつたのでしょうか。わたくしは、ふしぎに思います。これほどまで世間に気がねをし自分たちの立場を狭くして暮さねばならなかつた家族の方たちの苦悩は

どんなであつたことか。当事者以外はとも考えられないほど大きかつたでしょう。しかしまた、この不幸を荷つた姉弟をたゞ(恥)かしい存在とだけしか、みてやることができなかつたというのは、あまりに悲惨なことでした。親にしる、うまれた子供にしるけつしてそのような姿のものを好んでもとめた結果ではなかつたはずで。しかし、そのような姿にうまれついたとあれば、もはや、表面かれこれとりつくりつてみても、どうにかなるものではなく、そのありのままをあまんに受け入れるよりしかたがなかつたでしょう。その必然性をどうしても受けとれなかつたところに、この家族の悲劇がありました。

自分の存在の責任はいと同志の結婚だと、あなたは云つています。血族結婚は不具者をつくるものであるとして一般にこれを忌むのですが、あなたの場合、はたしてどうでしょうか。おそらく誰にも確信をもつてその原因について断言しうるひとはなからうと思ひます。かならずしもそのような子供がうまれるとはかぎらないかと思うからです。しかしおそらく、そのように考えているのは、あなた方ばかりでなく、ご両親も同様だつたらうと思ひれます。その悔恨としゆう恥とが異常児をまつたく人眼にふれさせまいとするあの生活態度をとらせたのであつたでしょう。(世間体がわるい)この考えが、わたくしたち弱者の心を、どんなにゆがめ、卑屈なものにしたことか。そして生きようとすゝる気持をすべてちつそくさせてしまふ魔力をもつておりました。軽蔑の視線と侮蔑のことばに、ひとはたやすくまいつてしまうものです。

自分が弱者の立場にたつてみないかぎり、ひとのその苦しきも理解しえないものかもしれないね。より子さん、生きてこの世にある限り、わたくしたちのこの苦悩は消えるはずのものではありません。ごまかさず雄々しくこの在り方を肯定しようではありませんか。

よく盲人の方たちは自分の責任であるはずのことに對しても、周囲のものにせいでと、間違つた責任回避をするひとが少くないように思ひます。これは明らかに健全とは云われない性格であり、そのようにしてしまつた社会一般にも責任はもちろんあるにしても、自分みずから反省する需要が大いにあります。心のゆがみは容易に自分で気付くものではありませんが、それで良しとしておつては世の中に通用しえない人間になつてしまふのです。あなたが二十数年の籠居から、はじめて接した社会、今おられる学び屋のふんいきは、おそら

く想像以上のきびしさかと思われれます。何事につけても、疑心、不信、そして絶望を抱かせずにはおられないような日常だということは再々のお便りからも察せられます。また先般おめにか、つたときの遠慮がちなお話からもうかがわれました。

—わたくしのようなものは、普通の人々の間ではもちろん、盲学校でも本当の仲間としては容れてくれない—何処にも心おきなく座るところを持たぬ苦悩をあなたは語っておりました。

それにしても、こういう私たちがこの夏の一日、思いもかけずお逢いできたというのも、まことに奇縁であります。いつまたお目にかかる日があるのかなのか、わかりませんが、いつまでも心だけは健康でありたい。魂だけは異常な人間になりたくないと願っています。あなたもそこに目標をおいて精進しておられるはずですよ。それでよいのです。ではごきげんよう。(十月二十五日)

より子さんは、文面からすれば、鈴木姓で、おそらく姉弟とともに三人が色素欠乏症だったのではないか。『春のだいち』発刊時の申し込みに始まり、昭和三年の夏に内田家を訪ねて、内田武志と初めて面会したことがわかる。しかし、それまで、「異常児をまつたく人眼にふれさせまい」とする配慮から「二十数年の籠居」が続いていたのである。この頃は寄宿舎を手伝いながら盲学校に行っていたが、やはり苦悩からは逃れられなかった。それに対して内田武志は、「魂だけは異常な人間になりたくないと願っています」と述べるのである。

この後には、「母の手紙」として、家族の書簡一〇通が載っている。

- ① より子の母より (昭和三〇年七月二三日)
- ② 鈴木みさを (昭和三〇年十一月二九日)
- ③ (鈴木みさを) (昭和三二年二月二九日)
- ④ 妹静子から (昭和三〇年四月七日)
- ⑤ 鈴木みさを、鈴木和子 (昭和三二年七月二二日)
- ⑥ (鈴木みさを) (昭和三二年八月二二日)
- ⑦ (鈴木みさを) (昭和三二年十一月二〇日、「より子からお母さんへ」同封)
- ⑧ (鈴木みさを) (昭和三二年六月八日)

⑨ (鈴木みさを) (昭和三二年七月二九日)
 ⑩ (鈴木みさを) 鈴木和子 (昭和三二年八月五日)
 そして、内田ハチ「うちに迎えて」が続く。昭和三年の夏に、より子さんが内田家を訪ねたときの様子を書く。

うちに迎えて

内田ハチ

まちを一まわりしてきた私とより子さんが玄関をはいると、まちもうけていた母がきいた。「どこへいったの?」「デパートよ。映画をみましょつかつて聞いたら、すこしでも長く、先生のそばに居たいつて」

より子さんは、次の間にはいり、さつそく兄のベットのそばで何か買物の包みをひらいてみせている。

私の家やつてくる、私たちの会の友を迎えると、母は力が体から溢れだすように、いきいきと立ち働く。それは私たち身体異常の子を持った母の、世に生きぬいたあの幾十年の心強いつくしみの力が、七十五才の今日なお身体の奥深くに静かにたくわえられて、自ら溢れてくるのだろう。

今朝、目ざめた時、二人ならんだ床にやすんだままで、より子さんは問いかけるように私に話しかけた。「私もし、先生に逢つていなかつたら、今ごろどうなつていたかしら」

だまつて、私はならんだ床からぬけて、ほの明るい空気をよどませているかやの外にでた。あなたはずいぶん変つた。はじめて逢つたあの時にくらべると、心でつぶやいたが、それは口にはしなかつた。

より子さんは、追いかけるように、「せんせい、お料理はせんせ作るの」。これには答えて、「え、朝も晩もわたくし、お料理つておもしろいわね。いろいろ考えて、人を喜ばせたり、驚かしたりできるもの」

そうして台所にゆくと、今朝はもう、母はごはんを炊いているのだ。かぼちやの鍋もかかっている。「このかぼちや、とてもおいしいよ、より子さんはかぼちやが好きかしら」

ときどき訪れる会の人の顔を見ると、あの人に、これもあれもと、ささやかな我が家の食事を、こんな時に私には知らせず、にぎやかに、盛りあげるすべ

を母はひとりでとりおこなう。その母の姿を私はたくましいと、いつも感嘆する。

そしてその時は、一層はつきりと思う、「お母さん、今まで生きてきてくださったてありがたかった。そしてやはり、私はこの仕事をするように決意してよかつた。これが一番お母さんを喜ばせる仕事だと、やつてみてはじめてわかつたから—」

この仕事—それは、とるにたりない小さな仕事ではあるけれど、ベットに寝たきり動けない重病の兄と私が、自分たちのかほそい力のありたけでとりかかつたものだ。

グループの名は（みちびきの会）。

より子さんは、その会友なのだ。

より子さんが、兄の前でつつみ紙をとくとき、なかからとり出したブローチ。それは、デパート売場をぐるぐるまわつていようち、ふと足を止めたケースのなかには、秋田名産の金銀細工のてがるな装飾品が並んでいたのだつた。この旅行の記念に身につけるものを何かと考へていた私は「どれか一つ、あなたのよいと思うのなにかしら—」

「あら、そんなこと、いいんです」とこたえながら、娘らしいひとみは、じつとなかに吸いよせられていた。

一番はじめに、ケースから出してもらったのは、銀の台の上に、小さなガラス玉が二つの輪をえがいてポチポチと双手をとりあうようにはめこまれているブローチだつた。私ならこれがほしいけれど、この人には地味すぎるかもしれない。そう思つて、もうすこしはでに見えるのをいくつかケースから出してもらうと、より子さんはそれを一つ一つ私のブラウスの上につけてみては、これでもないあれでもないといえらんで、とうとう最初の一つにきまつたのだ。そのえらみかたは、妹たちの買物する時のさまとまるでおなじなので、私はうれしかつた。

こんな態度は食堂でも見せられた。

「おひる、どこでとろうかしら、こゝのなかにもあるけれど」という私に「ここにもお食堂あるんですか」といかけるとより子さんの声が何かはずんでいるのを感じた。

食堂の陳列ケースのなかをのぞきながら、「何でも好きなものにしましょうね」といえば「これと、これと」とえらぶようすも、西洋皿の大肉をナイフで「なかなか切れないこと」と笑うあどけなさも、みんな自然な姿だつた。こんなにもう、人なかの生活をさばけるようになったのか、と私はすこし驚く思いだつた。……

こちらの部屋で母は私にそつと云つた。「より子さんは、デパートのお食堂でたべたのははじめてだつて、うれしがつていたよ、何をこちそうしたの?」「チャーハンはね、妹が今晚ごちそうしてあげたいつてますよつて私が言つたら、あらそれ、大好きなんだけれど、じゃ今はポークカツ、それから、ソフトクリームつてえらんだのよ。ハイカラなこのみなのね、より子さんは」「そう、よかつたね。なんぼ嬉しかつたんだろうね」と母が心底から言うのをみると、母の若かつたあの頃、私たちは父と母につれられて、デパートの食堂でお食事をしたあのうれしさが、母はきつと心のなかでホカホカと想いだされているにちがいない。そんなおもいで、この娘さんの今日のことを、わが子のことのように喜んでいるにちがいない、とそう思つてしまふのだつた。

この娘さんは、こんなにも普通なのだ。家にきてからこの二日間、わたくしたち家の者のなかにどんどんときこみ、しゃべり、笑い、きれいなブローチを胸につけたがり、大勢の人たちが食卓に並ぶそのなかで西洋料理をおいしそうに食べ、そして今、むこうの部屋からレコードのシャンソンの一曲がきこえてくる。ゆうべ妹がかけてきかせてあげたそのなから、きょうは自分で「アニイ・アンナ」が好きなのと、それをひとりでえらんで、たのしんでいるのである。

「あんなかわい、よい娘さんじゃないの—」母はもれてくる軽快なリズムをきくとまなしにきいて、またしても言う。

このことは奥にももる私たち兄妹の養育の苦心を私は知りたと思う。この母の心のすべてを知りつくすことだけで、私は身障者のお母さんと手をつなぐことがゆるされるのではないかと、私はしばらく考へていた。

実は、内田ハチが東京に出た折より子さんに会っていたことは、先の「母の手紙」の欄の書簡からも知られる。この時は秋田のデパートに行つて土産を買

い、食事をしてから家に来た。「人なかの生活をさばけるようになった」ので、「この娘さんは、こんなにも普通なのだ」と思ったことが書かれている。それと同時に、それを迎えた母の気持ちを推測し、「私たち兄妹の養育の苦心を私は知りたいと思う」と述べる。この関心は「身障者をかこむ人びと」の欄となつて、盲人の妻たちの言葉の特集することにつながっている。

四 内田ハチ「わたくしどもの在り方」(前半)

内田ハチの「わたくしどもの在り方」は、宮本常一に送った書簡をそのまま公開したものである。書簡の体裁を採りながらも、この中には宮本に対する鋭い批判が含まれている。長い文章なので、まず前半から引く。四カ所の註記は、本文だけでも内容が察せられるので、改めて引くことはしない。

わたくしどもの在り方

内田ハチ

宮本常一さんに

御多忙中を、いつもながらの御心のこもった御文ありがとうございました。兄と共に深く感謝しつゝ、読ませていただきました。いただいたお手紙に対して、というよりも、いまいまだ、現在までの自分たちの進んだ路の反省をいたし、これを契機としてさらに要望される方向への地がためをしなければならぬと思ひ筆をとりました。

今までに私どものやつてきた仕事は、だいたいつぎのように考えられると思います。

- 1 会誌発行(みちびき墨字、点字版)
- 2 会員を保つこと(盲人、晴眼者)
- 3 出版物の刊行(春の дайチ)

(春の дайチ)によつて、みちびきははじめられたと申しても過言ではないと存じます。この本の世に及した効果を一朝一夕にはかることは、今よくないうところではありません。ひとたび出版されたものは、時間的にも、地域的にも、長い連続的な影響を広いはんいの多くのひとびとにあたえるもので、

けつして個人的な片々たる憶測ではかることのできないものであります。

しかし、今あらたに、あなた様の御厚意により、出版物によつて広く問題を世に提供しようとする機運があるとすれば、あらためて、わたくしたちは、何のために、それは書かれなければならないかを考えてみなければなりません。もう、くわしい事については、兄がすべて申しあげていると思いますので、私は、私なりの立場だけで申しあげたいと思います。

「日本の子供達」(註1)にあなた様によつて(春の дайチ)をとりあげていただき、日本の多くの子供たちの問題のなかでお考えいただけましたことを、嬉しく思います。

この本のなかで「盲人の心の表現」は、他の子供たちの場合とよほど異つた条件を持つことを指摘されました。すなわち、「……それにもつと不幸なことは、一般のつづりかたのように、同年輩の仲間から共感をえられるということがなかつた。訴えてみてもなお孤独だつたのである……。また一般にこれらのつづり方は、自分たちの生活のなかにある暗さや、どうにもならぬさを訴える性質が強く、さらに向うにまでのびていない。そこに弱さがある。……」と書かれました。

なお次にしるされました、辺境の子どもの制約と盲人のそれとが、都会にすむ者や、中央にいる者には、見すごされてしまうところに相似たものがあるというお考えには、わたくしは同感を持つことができないのでございます。(春の дайチ)は、他に持たれた生活綴方々とは異なる要素を多く持つとみなければならぬのでありますまいか。

わたくしはいつかのラジオで、無着成恭さんが、「都会の子供といなかの子供」とをくらべて、「親のありがたさを、都会の子供は、ことばでかかれて知るが、いなかの子供は実際に自分が親の仕事を手つたうことによつて、親が生活のためにどんなに苦労しているかを知っている」といわれたのをききました。このような生産的な体験によつて自分の周囲と深いつながりを持つことが、ごく自然に可能となつてくるのです。

ですから、大関松三郎君の(山芋)(大関松三郎詩集 山芋 編集者さわ・みきお 百合出版)のように、

山 芋

しんくしてほつた土の底から
大きな山芋をほじくりだす
でてくるでてくる

でつこい山芋

でこでこ太つた指のあいだに

しつかりと 土をにぎつて

どつしりと 重たい山芋

おお こうやつてもつてみると

どれも これも みんな百姓の手だ

土だらけで まつくろけ

ふしくれだつて ひげもくじや

ぶきようでも ちからのいつばいこもつた手

これは まちがない百姓の手だ

つあつあの手そつくりの山芋だ

おれの手も こんなになるのかなあ

という愛情と力のこもつた詩が生活のなかから掘りおこされてくるのです。

わたくしは、詩集〈山芋〉を数人の盲人に送りました処、大関君とおなじ県の盲生、野沢シゲ子さんは「……山芋がつあつあの手だというところなど、私は泣いてしまいました。私のお父さんをその表現によつてしのぶことができたからです。私の父の手もみな同じだと考えたのです。勇しい少年の心には、夢があり、希望があり、実行力がかけつこして、生活のたのしさを教え支えてくれているのですね。うらやましくなりません。私たちにはどうしてこんな、はりきつたところがないのでしょうか。なさげなくて……」（みちびき第十一号）とのべています

〈春のだいち〉は生活の実行の直視を書いたものでなく、このように、いなかの子供の誰もが毎日おこなっていることからのけものにされて、生活と何のかかわりあいも持たされない空白の心の凝視をうたつたものです。

この心が、いつの日、実行によつて満たされたいですか。そうなる日がないければ盲児の書くものを、生活綴方のはんちゆうにいれることはできないのでしょうか。

辺境にある子どもは、それゆえ、たとい、中央には知られなくとも、また生活条件としては都会のそれとくらべて制約の多いものであるにしろ、生活そのものに満たされています。一つの自分の集団のなかにある位置を持つています。大関君の手がそれを語ります。

身障者の場合、それとまつた異つた制約にあることを、わたくしは事あらためて、申し述べなければなりません。

身障者は、生活からしめ出されているのです。他に知られないのは、単に地域が辺境であるためなく、自分を他からかくさねばならないように周囲にしいられるからにほかなりません。心の底を他にみせないのは、このような運命にある自分に課せられたひとつの手段なのです。訴えることが、なかまに向う場合、この口ひらく者を、なかまに反逆するものとして、極度に排斥しようとするのもまたこうした理由からうなずけるでしょう。「孤独」は当然の結果であろうと思われまます。

まして、「さらに向うにまでのびる心」は、たといある時の希いであつたにしろ、それを持ちつづける困難さは想像に難くありません。あなた様はこれを「そこに弱さがある」と結論づけられました。ところで、この八月のある日、あなた様が紹介されましたH社のSさんは、わたくしと兄の許に旅してこられました。

一片のパンフレットを示されたとき、それには「これまでわたしたち日本人は、パリの哲学者や、ハリウッドの女優の言動には、とかく心を奪れがちであつたが、わたしたちのすぐとなりに住む隣人の生活には、正しい関心をむけることは少なかつた。

わたしたちの隣人、それは誰からの助けも借りず、手さぐりで、ほかならぬわたし自身、あなた自身の姿である。そして、そこには、パリやハリウッドでは見出すことのできない、意外な智慧の果実や、すぐれた哲学の鉅脈が、ひかり、ひそんでいるかもしれないのに、わたしたちは、嫉視や好奇心の目を隣人にむけることはあつても、その隣人の尊い生から〈近代〉の栄養を吸いとり、学びとろうとするとはしなかつた。いわば、舶来の人工乳をのむことはあつても、自分たちの土地の母乳をのむことはしなかつたのである。

隣人に正しい関心の目をむけよう。もつと隣人と語りあおう。

「A双書」は、そのために、あなたにしたしくよびかける友であり、明日を信じ、夢みて、歩みつづけるひとびとへ、あたたかいほげましをおくる本である。わたしたちの生活はおおむねまずしいし、したがって、この双書に収められる記録は、かならずしも、すべて読者のロマンチックな期待にそいえないかもしれない。しかし、そのまずしいわたしたちが、いかにそれをのりこえて、ゆたかさへ通じる道をきりひらいてきたか。そのひとりひとりの行動の集積こそが、わたしたちのかけがえのない〈歴史〉であり、「A双書」が個人の行動記録を通して、生きた社会史の断面を描くことができれば、わたしたちの目的は達せられるのである。……」と書かれてありました。おそらく、Sさんは、その出版に価するものを求めて旅しておられたのでしょうか。

それにしても、Sさんは、兄に「逢うまでわたくしは、あなたに何を書いてくださいとおねがいしたらよいか考えつきませんでした。今逢って、話して、やはり、双書のため、かいていただけのように思えるのです。……」その企劃の方針は、帰京後あなた様と話しあわれたという様子を、おしらせになつたあなた様のお手紙は後にかかげました（註2）。

来訪されたSさんの前には、たしかにその時、わたくしたちの手許にあつた何千枚のうず高い原稿が積まれてありました。すべて盲人その他、身体障害者からよせられたことばでした。

熊谷鉄太郎氏の手紙にあるような、「盲人はみな筆不精で、なかなか書こうとはしません。たまたま書いても、人前にだせるようなものが少いようです。……」ということばは、人のたましいをあずかる職業を持つて、七十才の現在までに、おなじ盲目というなかに接してこられた盲人のすがたを伝えておられるのでしょうか、その事情は、あなたのおことばによれば、「日本の子供達」にのべられた、「自分の本当の心は、人びとに接するときに見せる心の奥にしまつておかねば、目に見える人びとの間でいきでゆけないことを、本能的に知つた。誰にも知つてもらえない、もうひとつの心を持つている孤独の中にいた」ということばで説明されると存じます。

それ故、むしろそれだからこそ、わたくしどものもとへは、それぞれの人たちから、何年とひきつづいた「誰にも知つてもらえない、もうひとつの心」の吐露が、流れつづけて溜まつているのです。

わたくしどもにむかつてのみ流れるこの細い流れ。

あなた様はこの流れをいかゞ解釈なさいますか。あなた様のお手紙にかゝれたこの仕事への理解に対して、もう少し、わたくしは申しあげたいことがあります。

〈春のだいぢ〉の紹介が、ある婦人雑誌に紹介されました。

子供の日にねがう

へいぼんな話題で いい

ひとりの ひととして

いちどで いいから

心からの会話をして みたい

母といたしく 語りあいたい

みんなには

うそだと笑えることが

わたくしには

しんけんな 苦しみの

おかしいでしょう フフン （須藤春代）

この詩のある婦人雑誌でフツ見ただけで、わたくしどもの処に手紙をよせたひとりの女は、それから後、自分のすがたを語り、生活を語り、その生活が、ほんとうに人間として歩むべき道であつたか、なかつたかを思いさだめるまでの手紙さえもが、数百枚の原稿に積まれているのです。

二十幾年かの歳月を、人はもしも、自分の肉親から「お前は死んだほうがよかつたのだ。おまえのいるおかげで、自分たちはみな、世間から不幸な目にあわせられるのだ。いつそ、お前のすがたは、人の前に見せないほうがよい。けつして、人のいる処にでてきてはならぬぞ」といわれつづけて、学校はおろか、山の奥ふかくかくまわれて、人の目を怖れる生活以外はさせられないものであつたとしたら、見もしらぬわたくしたちへ、手紙で訴えることから、その考えをかえてゆこうとするのは、むしろ、ふしぎといえ、あまりにもふしきな心の理解ではありません。

しかし、今、目の前につみ重ねてある原稿の一つ一つは、みな、そのように遠いみもしらぬ土地から、細い理解の一本の糸をつたわつて、流れてきたもの

ばかりです。

それらは、いずれも自分の周囲からは、死ぬこと、身をかくすことのみをせまられている自己の生命に、もう一度自分の心による考えの光を投射してみて、生命の価値を見さだめようとするその努力の記録でありました。

Sさんに、わたくしと兄とは、問いかけました。「この双書の編集のおこころはわかりました。ところで、いま、わたくしたちが、このように記録しているこの原稿は、あなたが今までに手がけられた、どのケースとおなじようでしょうか」

しばらく考えこまれたSさんは、はつきりと「じつは、どれともちがいます。この記録の人たちは、みな弱いのですね」

あなた様はこのことを「……こゝに弱さがある……」と指摘なさいました。A双書は、隣人の理解、隣人への問いかけを目的としております。隣人―そのなかまに入るには、あまりにも弱者にすぎるとりひとりのことばであると思すのでしょうか。たしかに、これは的中しております。

わたくしたちの仕事は、中央の文化人からは、あまりに僻遠であるため見すごされてきたある地方の、土に密着した生活を営む人びとの人生記録の紹介ではありません。ともすれば、それと混同されて考えられやすい、あなた様のおこばに、わたくしは、ひとこと申し上げなければならぬと思うのです。

むしろ、人目につきすぎる故をもつて、自分をとりまく者たちからは、どうかしてこれを自分たちの生活圏から、無いものにしてしまおうと計画され遠ざけられつゞけてきた人たちの「生活をとり上げられた」心の真相の表明なのです。

いつたい、このような心を、隣人にかぞえようとする社会は、日本にいま、存在できるのでしょうか。Sさんのいう「隣人たち」ということばを、「大衆」にかえたとき、あなたの「大衆は―一人一人は愚かに見えても―実に聡明だと思つています。……」ということばによつてよく説明できるでしょうか。

あなた様の過去何十年の日本常民文化研究所のお仕事は、この大衆の生活の智慧を、中央のたれひとり書きとめることを計画しないままで見すごしていた形から、記録に残すことでありました。たしかにこれは重要なことからであり、これこそが大衆の持つ智慧がどれだけ聡明に判断を持ちつゞけたものかを

明らかにする資料ともなるものでした。

わたくしたちに、ことばを寄せる人たちの心の文字を、たやすく大衆のそれであるとし、たゞちにも、隣人にうけとられるものと考えるところには、わたくしは今にして、疑いを持ちます

々みちびき々の会は盲人の隣人であり、おなじ場にあつて、たがいにちからになるのです。という心組みで会員になつたひとの晴眼者から、こういうことが言われてきました。「わたくしは、職場の友だちにさそわれて、組合の会合にたびたび出てみました。そこでなかまと話しあう共感に、またとない人間性のあるのを見出します。一方、盲人とのつきあいは、どうも感情的にいやになるのです。どうしても、この気持だけは、偽れません。わたくしは、自分を犠牲にするのは、いやです」

わたくしはこの人に、いいました。「大衆が足並を高くひびかせて、元氣よく進むとき、その足の下で、大衆の足の裏を仰いで、仕事をしなければならぬのが、わたくしたち々みちびき々のなかまです。それができないかぎり、あなたは、この会の心を汲みとることはできないでしょう。しかし、あなたをぎせいにすることができるというものでありません。(ぎせい)と考えるあいだは、ぜひつたいにこの人たちに近づくことはできません」

大衆を、ただちにあるグループとして考えるつもりではありません。たゞこのような例証をもつてしても、多勢の心の共通性だけでは、この人たちを隣人として互の視野のなかに許すことをしないありさまを、おつたえしただけです。

このようにして、大衆は、こうした人たちを、たやすく、自分の足でけおとし進んできた歴史は、長くつゞいていたのです。もし、大衆の生活が文字で記される日はきても、その大衆の意志のなかからは、この身障者の心や生活を書きとめる理由を見出すことはできず、まして、離ればなれの土地で、孤独にすごしているこの人たちが自身を、どうして、自分の手で記録を残そうとするでしょう。

Sさんが、「この人たちは弱いのですね」と申された意味はこんな意味だつたと思うのです。

々みちびき々は、このような人たちにかたりかける会でした。そのようにし

て得たこの人たちの心のそこからのことばによつて、わたくしは、はじめて、自分のなかまに訴えてみても、なお孤独でなければならなかったこの人たちの在りかたを理解できたのでした。

ここには、宮本常一が昭和三二年八月に岩崎書店から出した『日本の子供達 日本人の生活全集9』で、『春のだいち』を評価したことに對する反論が述べられる。内田ハチがひっかかったのは、「一般にこれらのつゞり方は、私たちの生活のなかにある、暗さや、どうにもならなさを訴える性質が強く、さらに向うにまでのびていない。そこに弱さがある」とした「弱さ」という言葉であった。

そして、「辺境の地にすむ者」が「世間から忘れられ勝になる」という、「その点については、盲人の境遇とも似たものがある」という指摘に對しても、反論を述べる。内田ハチは両者を同一視することはできないと考えたが、それは宮本が評価する「大衆」へも向けられ、「大衆は、こうした人たち（注石井盲人たち）を、たやすく、自分の足でけおとし進んできた」のであり、「大衆の意志のなかからは、この身障者の心や生活を書きとめる理由を見出すことはでき」ないと考えた。これは宮本ばかりでなく、日本常民文化研究所の活動に對する批判でもあった。

なお、文中に内田家を訪れて、「隣人」をキーワードにして、「A双書」の企画を話した「H社のSさん」というのは、平凡社編集部鈴木均のことであろう。この人も宮本の受け売りのようにして、盲人について、「この記録の人たちは、みな弱いのですね」と述べる。この言葉もやはり内田ハチの怒りを買うことになる。彼が持つて来た「隣人」は、内田ハチには説得力がなかったと察せられる。

「みちびき読後感」の欄には、平凡社編集部鈴木均の書簡が載る。それは「春のだいちその後」拝読させて頂きました。感動いたしました。コトバもひとつの大きな行動であるということ、これほど強く感じたことはございません。最近の多くの何々評論家諸氏の発言に、さまざまな疑惑を抱いていた時でございまして、とくに感銘が深かつたわけでしょう。〈春のだいちその後〉に書かれていることは、コトバが人間と人間の間を分裂させる作用をもつてい

ることの一例でもあります。同時にコトバが遠い地域の間と人間との間を連ねる重要な作用を持つていることの実例でもあるわけです。（十一月）という内容であった。

五 内田ハチ「わたくしどもの在り方」(後半)

続いて、「わたくしどもの在り方」の後半を引く。

ここでくみちびきにつらなるひとびとと、わたくしと兄の関係について述べてみたいと思います。

あなた様のおことばでは、Sさんにわたくしたちを、く指導者々であるかのように申されたようです。Sさんがこゝで話されたおことばの中にも、く傾斜々ということがありました。互の文通に、指導の側に立つ者と、指導される側に立つ者との関係を表現されたものでした。それを意識するしなにかかわらず、このような関係は、多くの交りにはよくみかけられる例です。しかしくみちびきにはそれがありません。わたくしと兄とがまつたくの弱者であると世の人に考えられている一つの例をあげましょう。

先日のある週刊誌に、有馬頼義さんという小説家が、記者にどんな小説を書きたいかと問われて、こう答えておりました。「私はいま、こんな小説をかいてみたいと考えている。ある血友病患者が、幼少時で命をうしなうというこの病いにもかかわらず、かろうじて死をまぬかれ、その身体の悪条件のもとに、三十幾年の生命を生きながらえている。たまたま、広島原爆患者の症状が、血友病のそれとよく似かよっていることを知つたので、この男は、自分が戦争中、広島にいたというアリバイをでつちあげ、一きよにして世の脚光をあびる。……」

小説とは、多くの人のこのみに合せて作られるものなのですが、この構想は世の大衆の常識をうがつて、その虚をついています。

〈春のだいち〉を世に送つたとき、ちよūd、有馬氏の書こうとする小説の主人公でもなりたがつているわたくしどもであるかのように、この本の内容をとりちがえた人もありました。

世の多くの人は、わたくしたちを、戦争にことよせてでも口をひらかないかぎり、ことばを発するすべを知らぬ弱い者と思いきんでいるのでありましよう。それが、わたくしどもの姿であり、々みちびき々に参加する人びとのすがたであります。たんに、身障者という理由にのみよるのではなく、この世で体験した、いろいろの苦しみによつて、自分が弱者であることを教えられた人たちであります。

々みちびき々の会は、この弱者のことばを通して、このような人たちが、いまこの社会に在ることを明らかにする責任をもちました。明確に語るためには、身障という体験を、自分だけの体験にしておかないで、ひととわかちあうことのできる共通の体験としてゆこうとする意志を持つて語るのではなくてはなりませんし、また、この事実を明確にうけとるためには、共感が持たれなければならぬと思います。

このような人を、わたくしは〈心ひらいた人〉とよびたいと思います。そして、この人たちの「心のそこからの叫び」をきくにおよんで、わたくしは次のことを知りました。

身障者が、現在つきあたつてい、どうにかして処理しなければならぬ問題は、それを解決するために、いくつかの可能性が、撰択不可能な状態におかれてい、る社会であるという事実であります。

辻村泰男氏はその書簡(註3)に「おそらく春代さんは、理療科課程をすすんで、それで生活してゆくの、一番危険性のない、しかし、それだけに無難でもあるが安易な、妥協的な途でしょう。盲学校での教育は、いまの日本の社会保障の水準のもとでは、やはり、何といつても、卒業したら何とか「喰べてゆける」人間の養成をねらわずには居られません。これは、特殊教育の目標のミニマムの線です。そのミニマムな線の確保すらむつかしい現状です。

春代さんの、ゆたかにされたたましいが、現実には、このミニマムな線へまで落着かなければならぬとすると、ここにもまた、大きな苦悩が人知れず悩まなければならないことでしょう。……

私の経験によれば、盲人にできない仕事というものは非常に少い。むしろ、工夫と努力を重ねれば、盲人にできない仕事はない。

しかし、ある仕事ができるということと、それで社会的に収入を得て生活し

てゆくということとは、別なことです。前者は教育の問題ですが、後者は社会の問題です。

盲教育の立場は、しかし、社会がだめだと言つて批判していれば、それでよいわけではありません。やはり、喰べてゆけること、というミニマムな線へ、いつさいの努力が集中されて行かざるを得ません」

もしいくつかの可能性がひらかれているならば、人間が、自分の意志を実現するためには、それらの可能性の、ひとつひとつを検討して、そのいきつところを考え、そしてえらびだせばよいので、それを実現できないのは、それを實現しようとする個人の意志と実行力が弱いからに他なりません。

しかし、もし、可能性が、ひらかれてはいない、個人の撰択の余地のないまに、外界の障害が大きく、しかもそれをのりこえなければ実現できない希望がつよい場合には〈絶望〉があります。このことをかきしるした〈春のだいちその後〉(未発表)の内容を、もう一度あなた様におもひみていただきたいと思ひます。

辻村氏は、この書簡のなかで「個人は、ひとり、この絶望の苦悩を、人知れず悩み終わるように教育の目標をさだめてある」と語られるにもかかわらず、唐突にまた、ことばをついで、「盲教育とは、盲人を教育することなのか、それとも、盲人に教育されることなのか」と語られるのです。

この二つの命題のこのような混乱が今日の盲教育界の現状をしめしているという意味に受取つてよいものでしょうか。これらの言に應える熊谷氏の感想は、この混乱に対する鋭い適言であると思ひます。後掲で熊谷氏は(註4)「盲教育とは盲人を教えることか、盲人に教えられることかという問題と、これに対する答えとは、まことにおもしろく読みました。いくつかの重要な問題が提供されていきますね。問題の所在をあきらかにすることが、その解決への一歩でしょう。……

々これが自分の運命だ々とあきらめてアンマをして一生をくらす、それも人生でしょう。もがき苦しむつつ向上の一路をたどることも人生でしょう。どちらが幸福かわかりません。しかしわたくしは、みずから後者をえらんだのです。おかげさまで一生苦しまねばなりません。

もちろん永遠の喜びもまたそこに得られるのです。現在の盲学校では、前者

をえらんでそれが安全第一の策だと考えているようです。が、実はけつして安全だと思つてしまつてはならないのです」

七十年の体験を語る盲教師は、苦悩はけつして人知れず悩むべきものでなく、実は、盲教育全体が、もつと激しくともに悩みともに問題のありかをさぐるうとするものでないかぎり〈絶望〉はいつの世までも続くものであることをしめしています。

さきに〈春のだいち〉出版の節、わたくしどもが本の題名を、「閉ざされた窓」と言いだした時あなた様は、それでは希望を感じさせない暗い題だと主張されて〈春のだいち〉の方をえらばれました。

すべてこの仕事は、希望ある処にこそ、現在の暗さに耐えて継続できるものでありましよう。

々みちびきが本場の発足をはじめたのは〈春のだいち〉によつて、〈絶望〉をしつたときからでした。こゝで、わたくしは、あなた様に、〈大衆〉と、〈心ひらいた人〉との別がはつきり申しあげられると思います。

辻村泰男氏の書簡は、この両者を明らかに書きわけておられます。即ち〈大衆〉と目される人は「盲少女のあの心のびかたや、いたいけな詩心に、感心し、賞讃している人は、いわば傍観者であり、盲人とはかわりあいのない社会に生きている人です」と述べております。

〈春のだいち〉に、まずもつてよせられた多くのことばは、これでありました。この人たちのことばに、さらにまたげん惑されて集まつたかのように見えるひとびともありました。そうした人に、わたくしが「春代さんは今、ひじょうに大きな問題にぶつかつています」と話してみても、ほとんどそれを理解しませんでした。

そのような人に加えて前述のように、内田は盲目の女の子をだしにして、有名になりたがつていとおせつかいな妄想をたくましくして人に告げる人さえをも包括しなければならぬ、こんな混乱はあなた様の目に明らかでしたので、今にして「々みちびき々については、とにかくよく育つてきたと思います」とおつしやつていただけるのだと思つたのです。

あの頃、幾度、わたくしが々みちびき々の発行を思い止まろうと御相談申しあげたことでありましようか。

あの時、あなた様が仰せくださいましたおことばを、わたくしは今もなお、胸にしかと彫り込めています。

「だまつて、十号をつみあげてごらん。そうなつて、はじめて会の方向が定まつてくるのだよ。人がすてておけなくなる。そうなるまでは、苦しくとも人の前でつぶやいてはいけぬよ」

もはや、傍観者からは、何の声もあがりません。

々みちびき々はたしかに、問題を感じ、また々みちびき々によつて啓蒙されたいと希う者の会としての方向が定まつてきています。

日本盲人伝道会委員長 柏井光蔵氏の書簡に「々みちびき々の「盲教育特集号」は興味深く読ませていたゞき、啓蒙されるところがすくなくありませんでした。今回の全国盲教育関係者、キリスト者協議会でも、何人かのひとびとから引用されてきました。八月廿二日」とあることから、その役割のありかたがおわかりいただけだと思います。

しかしこの〈絶望〉をうちやぶる仕事は、中途半端であつてはならないもので、世のすべての人間が「人間の価値の転換」をなしおせるまでは終わらないものであります。これほどまでに、世の底流を形づくつていく多くの人びとの考えが「すべての人間が平等である」という真実の自己改革に達するまでの道は、暗くどこまでもつづいていくようにみえます。々みちびき々によつて、片々たる弱者のことばを受取つた世のひとびとが思いをかえることがよいにできがたいものであることを、わたくしは感じさせられます。

否、むしろ、弱者であるからこそ、自分にもつとも密着するところの権威あるものによつて自己改革の意欲をもぎとられてゆくのです。

ともかくにも、弱いひとびとが、ことばを持つにいたつたということは、まことによるこぶべきことであります。いままでの日本に、こうした人たちのことばを、たしかに書きしるし、世につたえる計画のなされることはあまりにもすくなかつたのでした。

「々みちびき々の生命は、やつぱり盲人のたちばと、その苦衷とを、世論に訴え、これを理解してもらふことではないでしょうか。この方面におけるたゞ一つの機関として、どこまでもこれをのばしてゆきたいものだと思います。その意味において、第二、第三の〈春のだいち〉があらわれていいはずですよ」と

いう手紙は盲教師 熊谷鉄太郎氏からよせられたものですが、これのみならず、たゞいま々みちびき々によせられる期待のどんなに大きいものであるかは、この号にかかげます数人の盲人並びに晴眼者の感想文などによつておしはかつていただきましたかと思えます。

々みちびき々が盲人と晴眼者の話し合いの広場を持つていみで待望される理由を裏書きするものとして、この夏、秋田で催されました全国数学研究会の全国大会に研究発表をされました尾関育三さん(全盲者、教育大学、大学院学生)が、この会の後、わたくしの家で心静かに語りましたことばをおつたえいたします。

「わたくしは、このたび、他の晴眼の数学教師や、学生たちと、まつたく同じ立場で研究発表をいたしましたことに、大きな意義を感じております。

いままで、ながいこと、自分たちは、声をだしてはいけないもののように、思いこまされてきました。自分たち盲人は真実弱いのです。この弱い盲人の問題が、どうして、いままで解決されなかつたのかというわけが、やつとわかつてきました。心からの声をあげなかつたからです。いままで、本当に、自分の感ずること、望むことを、声に出し、文字に書くことがなかつたからです。

もし盲人の側からの声があれば、晴眼者は、非常に深いところまで考えがおよぶものであるということを思つてみることでできませんでした。盲人が真に理論的根拠を身につけて、発言するのであれば、このことは晴眼者によつて理解もされ、それに対処する方法が真剣に考えられる事実を、自分が実際にやつてみて、はじめて知ることができました。すなわち、晴眼者と盲人とは、できるだけ広く深く手をつなぐべきでした。盲人のなかまだけで、問題を解決しようとするところに、従来のつきあたりを感じて、絶望を味いつけた自分でしたが、普通科への参加によつて晴眼者と手をつなぐことから、はじめて、孤独を味わされることなくりました。

盲教育の問題が、盲教育のなかだけで解決しようとするところに、ゆきづまりがあるのです。盲教育のなかでは、盲人の可能性が充分育てあげられねばならないはずなのに、これが、しばしばかえつて要求阻止の方向への補導がなされます。このとき、わたくしたちは激しい劣等感と孤独感を味わされるのです。盲教育の目標を、ミニマムの線に固定させていることが、最悪なのです。

もし、教育目標が最低におかれるならば、実際の成果はそれよりも、さらに低いレベルで止るよりできないわけです。

何よりもまず、わたくしたち盲人を、それぞれの可能性による最上の実力をつけて、その上に立つ責任ある発言をさせることです。これが教育の使命でありませんか。

弱いわたくしたちが、もつと強くなるためには、一つずつ、そうした強いいたしかな実行の記録を、皆に示すことです。これ以外はありません。々みちびき々はその広場をわたくしたちに持たせるものとして、大きな意義を持ちます」

おおよそ々みちびき々の使命はおわかりただけたかと存じます。

わたくしがなぜ、さらに、研究的な機構を持たなければならぬと考えているかは、この人たちの手紙などによつておわかりくださることと存じますが、あえてひとこと申しあげておきます。

伊藤礼子さんのてがみのなかに、「今、鈴木、尾関の二人の先輩が、わたくしたちに話しかけていることは、どれ一つ反対することはできない当り前のことなのですが、こんなことでも晴眼者に話そうという気になつたことは、誠に晴眼者としてありがたいことで、これなくしては私たち晴盲の交流はありえないし、これなくしては、晴盲の間の理解はありえない、ひいては、盲教育の向上はあり得ないのではないでしょうか。私は身体障害者の一人ですが、健康人と対等に交り、話合うことをモットーとしています。この二人の話かけに対し晴眼者は対等に話合わねばならないと思います。……」

対等のつきあいを主眼とする、々みちびき々であることを、幾度か申しあげたのですが、それでは、理解は、知らずして成り立つものではないこともおわかりくださるかと思います。理解のために、あらゆる方法が講じられなければなりません。

わたくしたちは、この盲人の〈心ひらいた人〉によつて問題を提供されました場合、これを理解できるまで交るのになければ、対等な交りを持つことも、問題解決のための何かの役をはたすにもいたらないのではないかと思えます。

それゆえ、この人たちのことを世に告げると同時に、これを裏付けできる正確な資料研究を手にもつて、この人たちのことを強く支える必要を痛感い

たします。

この仕事をはたす所、それを、わたくしは、「教育研究所」と名づけて、その存在の必要性をあなた様に申しあげるのでございます。

「わたくしどもの在り方」の後半の内容は、末尾の「教育研究所」に集約されると思われる。この第一二・一三合併号には「教育研究所が欲しい」の欄があり、内田ハチの「教育研究所が欲しい」という文章が載る。他にも、尾関育三の「鈴木彪平さんの文を拝見して」や伊藤礼子の「晴盲の話合いについて」も載っている。全国数学研究会全国大会で研究発表をした尾関の内容というのは、「私どもの研究」の欄に載る、尾関育三の「盲児に対する空間指導」だったことは、そこに記された前書きからわかる。

六 内田武志「あたりまえのこと」

第一二・一三合併号の「紹介〈眼がほしい〉」では、昭和三年一〇月、東京の土龍社から発行された、福来四郎『眼がほしい』を取り上げて、「神戸市立盲学校の生徒たちのネンドの作品を紹介しながら、この子たちに初めて造形の喜びを教えた著者が、教師と教え子との心の交歓をえがいている」と述べた。内田武志の「あたりまえのこと」は、直接にはこれを受けるが、第一二・一三合併号全体を捉えて、次のように述べている。

あたりまえのこと

内田武志

わたくしのように、どこへもでかけることのできない者には、このたび発刊された〈眼がほしい〉はことのほか待ち遠しい気した。それは新聞などでつたえられた「無明の工人展」に出品された神戸市盲の生徒たちのネンド作品のいくつかを、立派な図版で見せてくれたからである。その内容については、もうすでに新聞雑誌にいくつもの紹介や批評がなされているから、あえて説かない。たゞわたくしなりの感想をのべることにする。

最初のころ、ネンドを与えても、盲生徒たちは「見たこともないもの作られ

へん」と云つて手を出さなかつたことを、よく書評などには引用されている。しかし犬やねこは触れたことがあるから作れる、馬は知らないから作らぬというのではなくて、心に感じた形で、もつと自由に心意現象を抽象的な作品に現わすように教える方が、より自然なのであるまいか。そんなあたりまえなことなら、盲児は教えられなくとも、ひとりで作つてみていのでなからうか。そんな考えが浮ぶのだが、この本をみると、どうもそうではないらしい。では、この児童でもが好んでするような手遊びを、どうしてしようとしなにか、そんなにも盲児の造型意欲を呪縛してしまう原因はどこにあるものなのか。今日の日本の心理学や教育学は、眼のみえない生徒の工作指導、特に物の形をまねるだけの造形と、自由な形での心意表現は、どうあればよいかなどについて、おそらくほとんど教えてはくれないにちがいない。

「そんなもの作つて何するのん？」福来教師の苦勞は、先ず盲生徒のこのまことに素朴な疑問に答えようとするための努力ではなかつたろうか。いま、盲学校で工作の時間などは、すべてアンマの特技の練習をしているところをわたくしはいくつか聞いている。ここでは情操教育の意義は盲児の心にどのような影響を与えるかなどは認めようとはしていないのである。

すべては理科につながる。盲生徒をアンマに仕立ることが盲学校で唯一の目標なのである。野沢シゲ子さんの日記にも「アンマがいやだというならゲンコだぞ」と教師に叱られているところがある(本号)。同じく、辻村泰男氏の言葉によると「盲教育の立場は、やはり喰べてゆけるということ、というミニマムな線へいつさいの努力が集中され」(本号)、理科をまなぶためには、むしろ情操教育の不必要を説いているように思えるのは、わたくしにとつて大きな驚きであつた。

福来氏はこの現状を暗示ぶかく〈陽の当らぬ砂地〉と題して先輩との問答の形で記しており(紹介文参照)、つづけて同氏は感慨深かげにしている。「この世界に足をふみ入れた人が植えた木の跡はあつても、光もとどかなかつたのであろうか。ひょうひょうとして方向のない風がこの砂地には根もおろさせなかつたのであろう」ことし八十周年記念をおこなつたという盲教育の世界を、なお不毛の砂地にたとえなければならぬとは、いつたいうことであろう。人間教育はこの世界におこなわれていなかつた証拠でなからうか。

「そんなこと、眼明きがおもしろがつて騒いでいるだけで、盲には何の役にもたちませんよ！」よく理療科の盲教師たちはこともなげに、こういうことばで盲生徒たちの心までを閉ざさせようとする。まことに手痛い反応である。この本からわたくしは、福来氏の苦悩と精進とを読みとることができた。すでにそんな経験を、わたくしなりに味わってきたからなのである。

それにしても福来氏の説明は、あまりに感情溢れた短文すぎて、指導記録としては、不十分な気がする。おそらく大衆向きの編集とした、ために頁の制限をうけたのであるらしいが、やはりもつと詳しい客観的な記述をしてほしかった。すでに用意されていると思うが、綿密な記録を続けてみせてもらいたい。

わたくしがこれを読んでいるとき、新聞広告に「盲児の異常心理を描く本格的探偵小説」として、仁木悦子の「粘土の犬」が紹介された。そこでさつそく〈宝石十一月号〉を求めてみた。

筆者は幼少からカリエスのため外出まったく不可能な女性であるが、本年度の江戸川乱歩賞を受けた新進探偵小説家だという。このようなひとが、盲児のネンド細工を、どのようにみているのか、わたくしの興味はそこにあつた。

仁木悦子は東京に住んでいるそうだが、たとえ盲児の作品展があつても、出かけて観られるようなひとではない。おそらく想像のみで組み立てられた小説であろうが、ここに扱われた盲児の姿は、まさに異常である。尋常な者には予想しえないような感覚記憶をもつ異常児として描かれている。これがおおかたのひとびとの盲人に対する認識なのであろうか。西欧でも中世までは〈悪魔の子〉と視て、これを忌んだというが、わか国でも盲女性を、イタコ(霊ばい)として使っていたことは、異常心理の持ち主にみているからにはかならない。

大阪市盲の八谷正氏の発言(本号)のように「先天性盲と暗眼者との間には断層がある。それに対して教育学も心理学も、何も教えてはくれない」と、いつまでも教師を歎かしている現状はまことに困つたものである。しかしそれをいつまでも手をつかねて漫然と、外の誰かゝ与えてくれるものとして待つていくようなのでは、いつまでも解決される筈がない。まず、何よりも実際に即して、ここにこういう問題があり可能性があるということに勇気をもつてつかみ出してみるのだ。たとえ自分たちの基盤がどんなに惨めであり、未熟であつても、まず、あるがままにとらえてそこから問題を発見させていく事だと思ふ。

盲学校教師は卑屈感を捨てて、盲児を人間らしい精神の持ち主に育てるために、取組むこと以外に解決の道はなからう。

考えてみると、盲人の教育施設や職業の場の確立については、他の身障者にくらべると、はるかに恵まれていると言える。身障者の総数ではもつとも数少い盲者の福祉のため、まことに喜ばしいことである。精薄児やし体不自由児らのほとんどが放置されている不幸に比べたら、封建時代からの遺産である治療師としての特権はいつまでも獲得しておきたいことだろう。しかし時代は進展する。近頃、眼明きの治療師に職域を犯されるとして、アンマ專業運動があるときくが、これは民主主義社会の現今としては、いささか時代錯誤の感がある。むしろ、メクラ即アンマといった社会通念がこわされつつあるのであれば、やはりここで従来の盲学校の教育方針に反省を加えて新職業開拓に努力しなければならぬと思ふがどんなものであるか。古い枠をそのままはめこんで、新しい時代に送り出そうとするから苦悩も深いわけなのだろう。それにはまず盲教師自身の反省からはじまる。盲生徒をどのような人間に育てなければならぬか、もつとも親身に考究してやるべきひとたちだからである。「—そんなことは止めてアンマの練習の方が何より大切だ」などと、盲児の可能性と将来の夢とをこわし、自分から盲人の向上をはばんでしまうようでは、いつまでたつても世間の異常者扱いは、なかなか改まるものでないことは至極あたりまえの話であらう。

この意味で香川盲の丹羽石見氏の提言(本号)は真をついている。学校教育の名に恥じなければならぬという点、わたくしも賛成である。それにしても、今日の盲学校と、真の盲学校とは、はつきり分けて考えねばならないものだろうか。もしそれが、あたりまえのことだとすると、実に不幸な現況だと云わねばならない。恐ろしいような気持になつてしまふわたくしである。

血友病で病臥する内田武志は『眼がほしい』を評価しながらも、形式的なネンド細工を作らせることには批判的で、「もつと自由に心意現象を抽象的な作品に現らすように教える方が、より自然なのであるまいか」と提言する。また、この本は「あまりに感情溢れた短文すぎて、指導記録としては、不十分な気がする」とも批判する。「客観的な記録」を求めるのは、彼が行った方言研

究と菅江真澄研究から見れば自然で、一貫している。

さらに、批判の矛先は八〇周年を迎えた盲教育それ自体に向けられる。盲学校の教育がアンマの技術を養い、喰べてゆける能力を習得すればいいとするのことに對する反論である。彼が提唱するのは「情操教育」、さらに言えば「人間教育」の必要性である。「盲学校教師は卑屈感を捨てて、盲児を人間らしい精神の持ち主に育てるために、取組むこと以外に解決の道はなからう」と提言する。盲人がアンマだけに束縛されるのではなく、「新職業」を開拓すべきであることを指摘している。

七 とりあえず、今わかってきたこと

昭和二十九年一月から昭和四〇年一〇月の一二年間は空白期間とされたが、この三冊を見るだけでも、決して空白ではなかったことがわかる。前半の五年間は、内田ハチが『みちびき』の編集に関わり、それを内田武志が支えたと思われる。その背景には、内田ハチが秋田榎山協会を知り合った須藤春代との関わりがあり、それが『春のだいち』の発刊によって、さらに盲教育の問題に展開したと知られる。

だが、須藤春代との関係は微妙である。『春のだいち』の発刊に向かう第三号には積極的に関わっていた。昭和二十九年三月、秋田市で開催された第二回盲人伝道会修養会に参加し、それに関わって文章が書かれている。一つは小山みや子・須藤春代連名の「修養会報告」、二つは「修養会を終えて」、三つは「詩」である。「詩」には「説教」「なみ」「地の底」「子供をだいて」「魂のさけび」「乙女の祈り」の六編が載っているが、これらは『春のだいち』以後の詩である。だが、須藤春代はこの活動から離れていったらしく、見つかった第一〇号と第一二・一三合併号には名前が見えない。

空白とされた一二年間の後半は、昭和四〇年一二月の宮本常一共編訳『菅江真澄遊覧記』に向かったと想像される。しかし、宮本常一と平凡社の関係では、その前に「A双書」の企画の話があがっていたことがわかった。これは、時期からすれば、「人間の記録双書」であろうか。やや気になるのは、編集部の鈴木均は「春のだいちその後」の原稿を読んで、「感動いたしました」と述

べながら、結局、出版されることはなかった。

商業出版ということでは、内田ハチが主導（ハチ自身はこの言葉を嫌うだろうが）した『みちびき』の運動は、『春のだいち』はあったにしても、そのまま実現することは難しかったにちがいない。内田ハチは〈大衆〉と〈心ひらいた人〉を区別し、『みちびき』は〈心ひらいた人〉の「広場」になったが、出版は宮本常一の敷いた路線である〈大衆〉で進んだ。

なお、本稿をほぼ書き終えた八月一九日、宮本常一の蔵書を所蔵する周防大島文化センター宮本常一記念館に問い合わせたところ、学芸員の高木泰伸さんから、次のような『みちびき』の所蔵があるという連絡があった。

- 『みちびき』 第二号、昭和二十九年（一九五四）二月、秋田榎山教会盲人伝道会
 - 『みちびき』 第三号、昭和二十九年（一九五四）五月、秋田榎山教会盲人伝道会
 - 『みちびき』 第四・五号、昭和二十九年（一九五四）十一月、みちびきの会
 - 『みちびき』 第七号、昭和三十一年（一九五五）一〇月、みちびきの会
 - 『みちびき』 第八・九号、昭和三十一年（一九五五）二月、みちびきの会
 - 『みちびき』 第一〇号、昭和三十一年（一九五五）一〇月、みちびきの会
 - 『みちびき』 第一一号、昭和三十一年（一九五五）五月、みちびきの会
 - 『みちびき』 第一二・一三号、昭和三十一年（一九五五）一月、みちびきの会
 - 『みちびき』 第一四号、昭和三十一年（一九五五）九月、みちびきの会
 - 『みちびき』 第一五号、昭和三十一年（一九五五）五月、みちびきの会
- 先の三冊以外の号については、九月に記念館を訪れて行方調査の折に調べることとした。本紀要の次号では、それらの号を検討し、本稿を補訂したい。なお、創刊号と第六号は記念館にも所蔵がないので、さらに調査を続けなければならない。

付記

ここで対象とした文章には、今日では差別的と考えられる表現が含まれるが、歴史的な意味を重視してそのまま引用することにした。